せるものと見るを以て當れりとせざる可らず、又注意すべきは、uiγur なる突厥文字にて uiγ〔u〕r 或は uiγur と書き、回鶻文字にても uiγur と書けるが、然も頭音 u は短母音にして輕く、第二音 i が長母音にして、語勢强かりしと見え、回教徒及び基督教徒等の此の名を記せるものを見るに、多くは i なる頭音を以て之を寫せり、卽ち Abul-faradj は Ighur; Rubruck は Iugures; Haiton は Iogurs と記し[2]、Assemani によれば、ネストル教徒の歷史には Ighur 或は Laghur の名が屢〻見ゆという[3]、烏なる字は u 又は o の音に應ずるものなることは明らかなれども、i の音を寫すには用ゐられざるが如し、されば uiγur の音が果して uiγur にして、u 音は輕微なるものなりしとすれば、此の場合にも韋を以て之を寫すの適當なるを知ると共に、烏を以てするの不合理なるを認めざる可らず、紇(ho, 廣東音 hāt) なる文字に就きては、前の Hirth 氏の論述する所に盡きたり、護 (ho) なる字を以て γuz を寫したりと見んには、語尾の z 音を缺けるものといはざる可らざれど、かゝる例は漢字を以てする音譯に於ては、一々枚擧に遑あらず、假令之を以て ui-γur を寫したるものなりと見るも、尙其の r 音を省略したるものと見ざる可らず、されば もし此等の文字が正しく原音を寫したるものなりとすれば、Oγuz なる部族の名は魏の時代より支那に知られ、後唐代に入りては、其の自から稱する姓部の數によりて、單に九姓と呼ばれたりしが、然も隋代よりはその九姓中の一なる韋紇 (uiγur) の名も、同一姓に屬する他の部なる僕骨・同羅・拔也古・斯結・渾等と共に鐵勒の一部として知られ、唐代に入りては更に之が廻紇・回鶻等の文字を以て記さるゝに至りたるものといふべし。

然も注意すべきは uiγur の名は此の如く漢史中には隋唐時代より盛に現はるゝに拘はらず、回教等の著者によりては遙かに後世に至る迄用ゐられず、西紀第十二世紀に至りて初めて其の名の記さる[4]ゝことなりとす。